『和泉式部日記』引歌・漢籍索引（二）

渡辺開紀

〈凡例〉

一、『和泉式部日記』注釈書において本文解釈のために指摘がなされた和歌、漢籍、仏典等にあたることができるように一覧化したものである。

一、注記項目は、岡田貴憲・松本祐喜編『『和泉式部日記／和泉式部物語』本文集成』（勉誠出版・二〇一七・「三条西家本」）に拠り、（　）内の上段に算用数字で頁数を付した。（　）内下段には、漢数字で〔角川〕の頁数を付した。

一、（358頁／四八頁）～（713頁／八六頁）の範囲での調査である。それ以前の範囲は拙稿「『和泉式部日記』引歌・漢籍索引（一）」（「滝川国文」35・平成三〇・3）をご参照いただければ幸甚である。

一、**【校異】**に用いた諸本と略号は次の通りである。なお、仮名遣いの相違は考慮しなかった箇所がある。

寛元本系統―（雅）雅章筆本……〔最新〕〔学術〕の底本に採択。（黒）黒川本……〔叢書〕〔講談〕の底本に採択。

応永本系統―（京）京大本　（図）図書寮本…〔全釈〕の底本に採択。

混成本系統―（群）群書類従本…〔校定〕〔詳解〕の底本に採択。

一、勅撰集・私撰集の和歌、及び歌番号は、『新編国歌大観』（古典ライブラリーWEB版）に拠る。私家集の和歌、及び歌番号は『私家集大

成』（古典ライブラリーWEB版）に拠る。その他、引用した作品は、原則として、「新編日本古典文学全集」（小学館）に拠る。

一、使用した注釈書と略号は次の通りである。

〔校定〕竹野長次『校定和泉式部日記新釈』精文館書店・一九三〇
〔詳解〕小室由三・田中栄三郎『和泉式部日記詳解』白帝社・一九三七
〔岩波〕清水文雄『和泉式部日記（岩波文庫）』岩波書店・一九四一→一九八一改訂版
〔昭完〕五十嵐力『昭和完訳和泉式部日記』白鳳出版・一九四七
〔修文〕木枝増一『和泉式部日記』修文館・一九四七
〔新註〕玉井幸助『和泉式部日記新註』世界社・一九四九
〔考注〕尾崎知光『和泉式部日記考注』東宝書房・一九五七増訂版
〔叢書〕川瀬一馬『和泉式部日記（新註国文学叢書）』講談社・一九五六
〔最新〕山岸徳平・村上治『蜻蛉・紫・和泉式部日記（最新国文解釈叢書）』法文社・一九五六
〔大系〕遠藤嘉基『和泉式部日記（日本古典文学大系）』岩波書店・一九五七
〔全書〕山岸徳平『和泉式部日記（日本古典全書）』朝日新聞社・一九五九
〔全講〕円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部日記』至文堂・一九六五→一九八三増補改訂版
〔全集〕藤岡忠美『和泉式部日記（日本古典文学全集）』小学館・一九七一
〔対校〕狩野尾義衛『対校和泉式部日記新釈』白帝社・一九七三
〔新書〕鈴木一雄『全対訳　日本古典新書　和泉式部日記』創英社・一九七六
〔講談〕川瀬一馬『和泉式部日記（講談社文庫）』講談社・一九七七
〔学術〕小松登美『和泉式部日記（上）（中）（下）（講談社学術文庫）』講談社・一九八〇～一九八五
〔集成〕野村精一『和泉式部日記　和泉式部集（新潮日本古典集成）』新潮社・一九八一
〔完訳〕藤岡忠美『和泉式部日記（完訳日本の古典）』小学館・一九八四

〔訳注〕今井卓爾『和泉式部日記訳注と評論』早稲田大学出版部・一九八六
〔新典〕平田喜信『和泉式部日記（影印校注古典叢書）』新典社・一九八六
〔ほる〕三田村雅子『日本の文学・古典編　和泉式部日記』ほるぷ出版・一九八七
〔新編〕藤岡忠美『和泉式部日記（新編日本古典文学全集）』小学館・一九九四
〔全釈〕由良琢郎『和泉式部日記全釈』明治書院・一九九四
〔全注〕中嶋尚『和泉式部日記全注釈』笠間書院・二〇〇二
〔角川〕近藤みゆき『和泉式部日記』角川ソフィア・二〇〇三
〔笠間〕岩佐美代子『和泉式部日記注釈［三条西家本］』笠間書院・二〇一三

一、引歌に限らず、語句や句法の説明のために示された和歌についても広く採録した。
一、その他、重要と思われる指摘を▼で摘記した。

94　思ひみたるゝ心ちはいとそゝろさむきに（361頁／四九頁）【校異】（雅・黒）思ひみたるゝほとの心ちはいとそゝろさむし（京・図）思ひみたるゝほとの心ちはいとそゝろさむきや（群）思ひみたるゝほとの心ちはいとそゝろさむきや

○しづはたに思ひみだれて秋の夜のあくるもしらずなげきつるかな（後撰集・恋五・九〇一・しのびたる人につかはしける　贈太政大臣〔角川〕

○いく世しもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるる（古今集・雑下・九三四・題知らず　読人しらず）〔角川〕

▼〔集成〕陰暦十月は初冬。感動が凝縮して戦慄する思いなのである。『源氏物語』紅葉賀巻に「入綾の程そぞろ寒きに此の世の事ともおぼえず」とある。

95　ふしたるをゝしおとろかさせたまひて（364頁／四九頁）【校異】（雅・黒）ふしたるをおとろかし給ひて（京）ふしたるをやゝおとろかし給て（図）ふしたるをやとおろかしたまひて（群）ふしたるをやゝおとろかし給て

▼〔詳解〕「や」とおどろかしたまひて―「や」は驚いたり、呼びかけたりするときに発する感動詞で、おや、もしなどに当る。「おどろかす」は目を覚させる。（後拾遺集二〇、雑六、入道摂政かれ〴〵にてさすがに通ひ侍りけるころ帳の柱に小弓の矢を結びつけたりけるをほかにてとりにおこせて侍りければ遣はすとてよめる、大納言道綱母、「思ひ出づる事もあらじと見えつれどやといふにこそ驚かれぬれ」）

96　時雨にも露にもあてゝねたるよをあやしくぬるゝたまくらのそて（365頁／四九頁）【校異】（雅・黒）（京・図）（群）二句「露にもあらて」

○秋ならでおく白露はねざめするわがた枕のしづくなりけり（古今集・恋五・七五七・題知らず　よみ人しらず）〔角川〕

○しくれにもあめにもあらてきみこふるわかころもてのぬるゝころかな（中務集Ⅱ・二四六・たれともなし、おとこ）〔学術〕〔角川〕

○おのづからいくよをふともたまくらのあかぬ契りにひちやくたさん（夫木集・一五三九六・六帖題、新六五　信実朝臣）〔校定〕

▼〔全講〕「時雨にも」の、先の宮の和歌をいう。以下、宮の和歌にはじまった「手枕の袖」がふたりの愛情のあかしともなって、たがいによばう合言葉のように詠みつがれていく。

▼〔全集〕「手枕」は『万葉集』にも「大君のみことかしこみかなし妹が手枕離れ夜立ちきぬかも」（三四八〇）などと歌われる。

▼〔新編〕手枕は『万葉集』にも「大君のみことかしこみかなし妹が手枕離れ夜立ちきぬかも」（三四八〇）などと歌われる。

▼〔全注〕「『たまくらのそで』なることばは、これ以降しばらく二人の心を結びつけるキーワードとして機能する。「『手枕の袖』は、王朝的ニュアンスを持つ歌語」（『清水文庫』）というが、「たまくら」なることばは『万葉集』に用例を見るものの、『拾遺集』撰集初見として、その後は『金葉集』所収歌以降の歌語であって、目新しい感覚を伴うか。ちなみに『源氏物語』には「手枕」の用例はなく「にひたまくら」一例を見るのみ。『小松文庫』に「手枕の袖」について、「帥宮以前の用例未見」とあり、『伊藤研究』（130～132頁）は、この日記で「はじめて使用された宮と女ふたりだけの愛のことば」としている。

97　たゝ月かけに涙の落つるをあはれと（367頁／四九頁）【校異】（雅・黒）（群）たゝ月の影に涙のおつるをあはれと

▼〔全注〕『千載集』恋五（家集にも）に収める「ともかくもいはばなべてになりぬべしねになきてこそみすべかりけれ」という和泉式部の歌の世界そのもの。

98　心からにや（377頁／五〇頁）【校異】（京・図）（群）ところからにや

▼〔学術〕「心から」何かの引歌と見て解した。

99　そらゆく月にもあらん（386頁／五一頁）【校異】（京・図）そらゆく月にもあらす

○わするなよほどは雲ゐに成りぬともそら行く月の廻りあふまで（拾遺集、雑下・四七〇・たちばなのただもとが人のむすめにしのびて物いひ侍りけるころ、とほき所にまかり侍りとて、この女のもとにいひつかはしける　／拾遺抄・五二八／伊勢物語・一一段）〔校定〕〔詳解〕〔岩波〕〔昭完〕〔修文〕〔考注〕〔全集〕〔集成〕〔新典〕〔新書〕〔完訳〕〔全講〕〔学術〕〔訳注〕〔ほる〕〔新編〕〔全釈〕〔全注〕〔角川〕

○めぐり逢はむかぎりだになき別れかな空ゆく月のはてを知らねば（狭衣物語・巻四・②三四八頁、狭衣）〔校定〕〔講談〕〔全注〕

▼〔新註〕空ゆく月のやうな遠い仲になつてしまふであらう。引歌でもありさうな句であるが、むしろ歌から引いたのではな当時の人々の慣用語なのであらう。前に二三段の歌にも、こころみに雨も降らなん宿すぎてそら行く月の影やとまると、といふのがあつた。拾遺集橘直幹の歌、「忘るなよ程は雲井になりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで」があるが、ここは適切でない。狭衣物語の「めぐり逢はむ限りだになき別れかな空ゆく月のはてをしらねば」は、やや適してゐるが、この日記の頃には狭衣はまだ書かれてゐなかつた。

▼〔最新〕それっきりふたりの仲は離れてしまうでしょう。「空行く月」は、従来、拾遺集巻八、橘直幹の「忘るなよほどはくもゐになりぬとも空行く月のめぐりあふまで」の第四句を引いていると言われていたが、玉井博士は、右の歌の歌意は適切でないとして、狭衣物語の「めぐり逢はむ限りだになき別れかな空行く月のはてを知らねば」を引いたものとされた。歌意よりして、玉井説の方が妥当であろう。玉井博士は、狭衣はこの作品の制作時にはまだ作られていないとして、疑問にされたが、この作品を和泉式部の日記ではなく、後人の創作と考えれば、この疑問は解決しよう。

▼〔全書〕当時の慣用句か。

▼〔大系〕たぶん、「忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで」（拾遺集八・雑上・橘の直幹）の第四句を踏まえたのであろう。二人の間が遠のいてしまうことを謳ったものである。そういえば、四一二頁15行の「こゝろみに雨もふらなんやどすぎて空行（く）月のかげやとまると」の「空行く月」も、式部からはなれて、遠い人となろうとする宮をおそれる気持ちが感じられはしないか。とすると、これ「二人の間のへだたること」を意味する慣用句とも受け取られる。

▼〔集成〕「こころみに雨もふらなん宿すぎて空行く月の影やとまると」を思い出した。

100　つきなきみなれはにや（388頁／五一頁）【校異】（京・図）つきたなき身なれは（群）つきたよりなき身なれはにや

○人にあはむ月のなきには思ひおきてむねはしり火に心やけをり（古今集・雑躰・一〇三〇・題知らず　小野小町／小町集Ⅰ・二四）〔学術〕

101　山のあなたにしるへする人（392頁／五二頁）【校異】（京・図）山のあなたにしる人

○みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ（古今集・雑下・九五〇・題しらず　よみ人しらず）〔校定〕〔詳解〕〔岩波〕〔昭完〕〔修文〕〔新註〕〔考注〕〔叢書〕〔最新〕〔講談〕〔学術〕〔全書〕〔大系〕〔全集〕〔対校〕〔新書〕〔全講〕〔集成〕〔完訳〕〔訳注〕〔新典〕〔ほる〕〔新編〕〔全釈〕〔全注〕〔角川〕〔笠間〕

○世にふればうさこそまされみよしののいはのかけみちふみならしてむ（古今集・雑下・九五一・題しらず　よみ人しらず）〔校定〕

○いかならむ巌の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ（古今集・雑下・九五二・題しらず　よみ人しらず）〔校定〕

○てさ（マヽ）ひやしけにとおもふにいとゝしくおもひのはゐはゐられさりけり〔和泉式部集Ⅱ・六四二・山のあなたにとのみ、二日ふしたるに、ひをけとてお□るに〕〔全講〕〔考注〕〔全注〕〔角川〕

※「てさひや」の歌、『新編国歌大観』所収の和泉式部続集では初句「てすさびや」とする。

102　あけぬ夜の心ち（392頁／五二頁）

○あけぬよのここちながらにやみにしをあさくらといひしこゑはききや（後拾遺集・一〇八一―一〇八二・実方朝臣をんなのもとにまうできてかうしをならし侍けるに、をんな心しらぬ人してあらくましげにとはせてければかへり侍にけり、つとめてをんなのつかはしけるよみ人しらず／実方Ⅱ・一二五／実方Ⅲ・一九七）〔角川〕

○人しれぬねやはたえする郭公　たゝあけぬよの心ちのみして（清正集・五六・五月はかりに、ことかたらはんとひとこゑもせす、といへりけるをんなに）〔詳解〕〔考注〕〔訳注〕〔対校〕〔学術〕

○明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむ（源氏物語・明石巻・②二五七頁、明石君）〔校定〕

▼〔最新〕特に引歌と考える必要はないであろう。

▼〔全講〕慣用表現と見てよい。

103　われよりほかの（398頁／五二頁）

○おもほえす涙の川にぬれきぬを　我よりほかにたれかきるへき（馬内侍集・四七・返し）〔学術〕〔ほる〕

○未詳。〔詳解〕〔全集〕〔対校〕〔全講〕〔完訳〕〔訳注〕〔新編〕〔全注〕〔角川〕

104　露むすぶみちのまに〳〵あさほらけぬれてそきつる手枕の袖（407頁／五三頁）

▼〔学術〕「濡れてぞきつる」の背後には『万葉集』十、「秋萩の咲き散る野辺の夕露にぬれつつ来ませ夜は更けぬとも」があろう。（『古今六帖』一、露にも、すこし変って出て来るが、『万葉集』の歌のほうが『日記』に近い）。

▼〔全注〕「露むすぶ」の表現、勅撰集では『新勅撰集』以降に用例を見る。

105　道芝の露におきゐる人によりわがたまくらの袖もかはかず（409頁／五三頁）【校異】（京・図）（群）二、三句「露とおきゐる人よりも」五句「袖はかはかす」

▼〔学術〕「人」は、宮を婉曲に指す。『栄花物語』「玉の台」の巻の「朝まだき急ぎ折りつる花なれど我より先に露ぞ置きける」に見るように、和泉式部の時代、「露」は、早起きの人よりもさらに早く置くものと考えられていた。したがって、その露に誘われるように夜深くあわただしく帰った恋人を恨む女心がこの歌にはこめられている。

▼〔全注〕「道芝」は、勅撰集では『新古今集』以降の歌語。『伊藤研究』（138～139頁）には、『小大君集』『重之子集』『大弐高遠集』などの私家集、また、『狭衣物語』で飛鳥井女君の呼称として用いられていることの指摘がある。ここも「おき」に「起き・置き」を掛ける。この歌、詞書「おなじ人の返ことに」、二句を「露とをきゐる」で正集に収める。

106　たまくらの袖にも霜はをきてけりけさうちみれはしろたへにして（413頁／五四頁）【校異】（京・図）（群）三句「霜はをきけるを」

○うめがえになきてうつろふうぐひすのはねしろたへにあわゆきぞふる（万葉集・巻十・一八四四〈一八四〇〉・〔校定〕

○大鳥の羽に　やれな　霜降れり　やれな　誰かさ言ふ　千鳥ぞさ言ふ　……（風俗歌「おほとり」）〔学術〕

○君こずはねやへもいらじこ紫わがもとゆひにしもはおくとも（古今集・恋四・六九三・題しらず　よみ人しらず／六帖・六七一・「霜」、三一七七・「もとゆひ」）〔学術〕

▼〔角川〕露が霜となるという着想は「露結びて霜とはなるなり」（八雲御抄）、「草木揺落シテ霜露ト成ル」（文選・燕歌行）など。

107　つまこふとおきあかしつるしもなれは（415頁／五四頁）

○わがをかのおかみにいひてふらしめしゆきのくだけしそこにちりけむ（万葉集・巻二・一〇四）〔学術〕

○鴛鴦ノ瓦ハ冷ヤカニシテ霜華重ク　翡翠ノ衾ハ寒クシテ誰ト共ニセン（白氏文集・長恨歌）〔角川〕

▼〔全集〕女の歌に対して上の句をつけ変えたもの。したがって、「つま恋ふとおき明かしつる霜なれば今朝うち見れば白妙にして」となる。

▼〔全注〕この句、諸本改行し一、二字下げて歌の一部の形で書いている。女歌に対するふつうの答歌ではなく、「一種の唱和」（『清水文庫』）といえるもの。『山岸文庫』は和泉の前歌の下句「けさうちみればしろたへにして」と続いて、連歌形式になっていると説く。女に

対して「つま」と表すのは、後文に「しのひのつま」とある部分との二例。自邸入りをすすめたあと、この言いまわしが現れることに注意したい。『小松氏文庫』に、「帥宮が女を初めて『つま』の語で意識した記念すべき条である」とあるが、ここは「女に気を持たせて機嫌を取る言葉」（藤岡忠美「和泉式部日記『日次歌群』成立考」『国語と国文学』平成12年1月）ぐらいの気持ちか。

108　ねぬる夜の月はみるやとけさはしもおきゐてまてとゝふ人もなし（421頁／五五頁）【校異】（雅・黒）二句「月をみつとや」四句「おきてまてとも」（京・図）二句「月はみつやと」（京）四句「おきいてまてと」（図）四句「おきいててまて」

○ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな（古今集・恋三・六四四・人にあひてあしたによみてつかはしけるなりひらの朝臣／六帖・二〇三〇・なりひら「ゆめ」／伊勢物語・一〇三段／業平集Ⅰ・五〇などにも）〔全注〕〔角川〕

○いつとてもあはれとおもふをねぬるよの月はおぼろけなくなくぞ見し（新古今集・恋四・一二五八・題しらず　中務／中務集・一八六・夜へのつきみけむやと、人のいへるに）〔学術〕

▼〔全集〕九月二十余日の有明けの月に、宮が訪れたのに、門が開かずに帰った夜のことを皮肉る。→一一三ページ。この際の女の歌「よそにてもおなじ心に有明の月を見るやとたれに問はまし」を想起している。

109　まどろまでひとよながめし月みると（423頁／五五頁）【校異】（黒）二句「ひとになかめし」（京・図）（群）三句「月みれと」

○おきながらあかしつるかなともねせぬかものうはげのしもならなくに（後拾遺・恋二・六八一・人のたのめてこずはべりければつとめてつかはしける　和泉式部／和泉式部集Ⅱ・二三八・冬比、人のこむといひて、みえすなりにしつとめて、和泉式部集Ⅲ・一〇三、Ⅳ・一四六）

▼〔全講〕『正集』四〇一は、詞書「人のかへりごとに」。二・三句「ひとりながめし月みれば」、第五句「あかしがほなりて」で、大分意味がかわってくる。

※〔全講〕の指摘する和歌は次の通りとなる。

人のかへりことに

三九三　まとろまてひとり詠し月みれはおきなからしもあかしかほ也（和泉式部集Ⅰ）

▼〔全集〕先夜は月をながめていたと、宮の誤解に対して弁解し、今朝まで起き明かして得意そうなのは宮のほうこそあやしいものだと逆襲する。一一五ページの女の歌「まどろまであはれ幾夜になりぬらむただ雁がねを聞くわざにして」も参照。

▼〔新編〕手習文中の女の歌「まどろまであはれ幾夜になりぬらむただ雁がねを聞くわざにして」および宮の返歌を意識。

110　しものうへにあさひさすめりいまはゝやうちとけにたる気色みせなん（425頁／五五頁）【校異】（黒）四句「うちとけわたる」

○衆罪ハ霜露ノ如シ慧日能ク消除ス（観普賢経）〔学術〕〔角川〕

▼〔全注〕「いまははや」は勅撰集では『古今集』『後撰集』に例があるが、そのあと八代集に用例を見ない言い回し。この歌、「をそくまいりいみしく侘れは」の詞書で正集に収める。

111　ころしてはやとまてなん（428頁／五五頁）【校異】（雅・黒）心してはやまてなん

▼〔全講〕「童をころしてやりたい」とは、情趣生活への執着の根強さ、その情趣という共通の地盤でふかくひたりあった女への執心、そうした生活に対する自らの姿勢が裏目にでた時のはげしい妬たさをものがたる言葉である。それにしても「殺す」はおだやかでない。かかる言葉を吐かせるのはおそらく宮の若さであろうが、父冷泉院や兄花山院の性格や生涯にまでさかのぼらせて、血統的なもの、遺伝的なものと解することもできよう。かつて、式部との外泊のあと、「今朝は鳥の音におどろかされて、にくかりければ、殺しつ」といい、「鳥のはねに御文をつけて」贈ってよこされたこともあった。

112　あさ日影さしてきゆへきしもなれとうちとけかたき空の気しきそ（429頁／五六頁）【校異】（京・図）初句・二句「あさひさす今はきゆへき」（図）五句「空のけ色に」（群）初句・二句「朝日さし今はきゆへき」

○衆罪ハ霜露ノ如シ慧日能ク消除ス（観普賢経）〔学術〕〔角川〕

113　ことはりやいまはころさしこのわらはしのひのつまのいふことにより（433頁／五六頁）

○ことわりやいかでかしかのなかざらんこよひばかりのいのちとおもへば（後拾遺集・雑三・九九九〈一〇〇〇〉・丹後国にて保昌あすかりせんといひけるよしかのなくをききてよめる　和泉式部／和泉式部集Ⅲ・一二二、Ⅳ・二一一）

114　人しれす心にかけてしのふるをわするとやおもふたまくらの袖（435頁／五六頁）【校異】（雅・黒）「人しれぬ心にかけししのふをは枕とやみる手枕のそて」（京・図）（群）初句「人しれぬ」

○こころにはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる（六帖・二六四八・「いはでおもふ」）〔学術〕

▼〔最新〕和泉の歌。底本第四句を「枕とやみる」とするが、「まくら」の語が不審である。三条西本はじめ諸本は「わするとやおもふ」としていて、この方がわかりよいが、家集には「まくるとやみる」とあり、おそらく「まくる……」とあったものを「る」を「ら」に誤り、それを下の「手枕の袖」にひかれて、漢字「枕」を当てたものであろう。従って底本を改めて「まくるとやみる」と訂した。日記の他本は後に訂正をして「わするとやおもふ」としたものであろう。「まくる」は「負くる」で、情にほだされて負けてしまうの意。またこれは、袖を「捲くる」の意もかけて、下の「袖」の縁語にもなっている。「つらけれど忘れやはするほどふればいと恋しくに今日はまけなむ（和泉式部集）」、「女にてはまけ聞え給へらむに、罪ゆるされぬべし（源氏、関屋巻）」。この歌家集に「手枕の袖は忘れ給ひにけるかと宣はせたるに」と詞書してみえる。

115　心やゆきてとあはれに（442頁／五七頁）

○夜な夜なはめのみさめつつおもひやるこころやゆきておどろかすらん（後拾遺集・七八五・恋四・題不知　道命法師）

〔校定〕〔岩波〕〔最新〕〔全書〕〔大系〕〔全講〕〔新書〕〔訳注〕〔集成〕〔対校〕〔新典〕〔学術〕〔ほる〕〔新編〕〔全釈〕〔角川〕

○思ひやるこころやゆきて人しれずきみがしたひもときわたるらん（新撰和歌・三三四）〔笠間〕

▼〔詳解〕引歌があらうが未詳。

▼〔考注〕本文の引歌とは考へにくい。

▼〔全集〕（※道命の歌を挙げ）同時代の歌のため確定できない。
▼〔全注〕（※道命の歌を挙げ）あるいは慣用的な表現か。

116　うちなかめられて（445頁／五七頁）【校異】（雅・黒）かけはしうちなかめられて（京・図）かくはしうちなかめられて（群）かけはしうちながめられて

▼〔校定〕「かけはしうちうちながめられて（一本、斯く端トアリ）」に施注―○かけはし。懸造の橋、山の岨の絶えたところんどに架けた橋。又は、かりそめに架け渡した橋。爰は、遠い山をさして「かけはし」と云うたもの。新六「名に高き木曾のかけはし引き渡し雲居に見ゆる望月の駒」
▼〔考注〕「うちながむ」は歌などを声に出して吟ずる、口吟する意である。
※〔全講〕は、『源氏物語』総角巻の用例を挙げ、〔考注〕に従う。

117　ふけぬらんと思ふ物からねられねとなか〳〵なれは月はしもみす（447頁／五七頁）

▼〔角川〕なまじっか物思いが増すので月は見ません。意表を突く内容だが、『和泉式部集』には発想のよく似た歌「寝られねど八重葎せる真木の戸に押しあけがたの月をだにみず」がある（正集・続集に重出）。

118　みてもなけくということにこそ（456頁／五九頁）【校異】（雅・黒）みえてもなけくという事にこそ

○見ても又またも見まくのほしければなるるを人はいとふべらなり（古今集・恋五・七五二・題しらず　よみびとしらず）〔詳解〕〔岩波〕〔新註〕〔考注〕〔叢書〕〔最新〕〔講談〕〔全書〕〔大系〕〔全集〕〔対校〕〔新書〕〔集成〕〔完訳〕〔訳注〕〔新編〕〔全釈〕〔全注〕〔角川〕
○あひ見てののちの心にくらぶれば昔は物もおもはざりけり（拾遺集・恋二・七一〇・題しらず　権中納言敦忠／拾遺抄・二五七／敦忠・一四三）〔校定〕
○みてもおもひみずてもおもひおほかたはわが身ひとつやものおもふやま（六帖・九一二・「山」）〔笠間〕
○未詳。〔修文〕〔新典〕〔ほる〕

▼〔全講〕「見てもなげく」ということがございますから、それで。「見てもなげく」をそのまま語句とする引き歌はみあたらないが、ふつう、『古今集』巻一五・恋五・よみ人知らず「見ても又またも見まくのほしければ馴るるを人は厭ふべらなり」をあてている。歌意は、たまに逢っても、またまた逢いたく思われるものだから、（たまに逢うことによっていよいよひきつけられる恋心のたかまりを好んで）それで、見馴れることをあの人はいやがるもののようだ。馴れるとかえって情がうすらぐという人情の機微にふれた歌で、したがって、女のいう「見てもなげく」も、宮邸にあがっていっしょに暮らすようになっても、かえって今の宮の愛情が冷えて嘆くようなはめにおちいるかも知れない危険を予知して、女はこれ以上深入りすることを危惧しているわけである。心ではすでに宮邸入りを承諾している。しかしなお危惧の方を表に出しているのである。

119　しほやきころもにてそあらん（457頁／五九頁）【校異】（雅・黒）しほやきころもにそあらん（京・図）ナシ（群）しほやき衣にそあらん

○しがのあまのしほやきごろもなれゆけどこひてふものはわすれかねつも（六帖・三二八六・「しほやきごろも」）〔昭完〕〔叢書〕〔講談〕〔考注〕〔最新〕〔全書〕〔大系〕〔全集〕〔対校〕〔集成〕〔新書〕〔完訳〕〔訳注〕〔新典〕〔学術〕〔ほる〕〔新編〕〔全注〕〔角川〕〔笠間〕

○いせのあまのしほやき衣なれてこそ人のこひしきこともしらるれ（六帖・三二八七・「しほやきごろも」）〔詳解〕〔岩波〕〔修文〕〔新註〕

※「伊勢の海人の」の歌の詠者を柿本人麻呂と注する指摘は、古今六帖の作者名表記の原則を読み違ったもので、誤り。

▼〔校定〕海辺で塩を焼く人の着る粗末な衣。「塩焼衣にてぞあらむ」は、式部が宮に「もし御心変りでもあればと思ひ悩んでゐる」と申上げたので、塩焼衣のやうに、疎遠になってゆくかも知れんと、冗談半分に仰っているのである。古今「須磨の海人の塩焼衣をさを荒み間遠にあれや君が来まさぬ」（須磨の海人の着る塩焼衣は箴が荒い為に織目が遠いが、そのやうに道が遠いからか、君が通うて来ない）新古今「馴れ行くはうき世なればや須磨の海人の塩焼衣間遠なるらむ」（馴れて行くのは、やがて飽かれるつらさのある世の中であるから、逢ふ事が間遠なのであらう）万葉「須磨の海人の塩焼衣の藤衣間遠しくあれば未だ着馴れず」（間遠く隔っているから、なれ近づかないで逢ふことが出来ない、上三句は間遠くと言はん為の序）源氏「塩焼衣のあまりめなれ見立てなく思さるゝにやとだえおくを」とある所の注に細流が「須磨の海人の塩焼衣なれ行けば疎くのみこそなりまさりけれ」といふ歌をあげてゐる。さて万葉集に「須磨の海人の塩焼衣の馴れなばかひと日も君を忘れて思はむ」（馴れたならば一日だけでも君を忘れることがあらうか）「志賀の海人の塩焼衣馴れぬれど恋

といふものは忘れかねつも」（恋しい人となれ親しんでも恋といふものは忘れ難いものだ）などいふ歌もある。此歌によったものならば、たとひなれ親しんでも、私の愛は変らないといふ意味になるが、多分前者の意で、或は塩焼衣のやうに疎くなって行くかも知らんが、来て試して御覧よと言うたもの。

120　をかしげなるまゆみの紅葉の（458頁／五九頁）【校異】（雅・黒）おかしけなるまゆみのあるか（京・図）をかしけなるまゆみの（群）おかしけなるまゆみのあるか

○ひきふせてみれどあかぬはくれなゐにぬれるまゆみのもみぢなりけり（古今六帖・四〇九七・つらゆき「まゆみ」）〔対校〕〔全注〕

121　かつらきのかみもさこそはおもふらめくめちにわたすはしたなきまて（467頁／六〇頁）【校異】（雅・黒）三句「おもひけめ」四句「ちきりたえつゝ」（京・図）三句「おもひけめ」（群）「おもひけめ」

○葛木やくめぢにわたすいはばしの中中にても帰りぬるかな（後撰集・恋五・九八五〈九八六〉・かれにけるをとこの、思ひいでてまできて、物などいひてかへりて　よみ人知らず）〔考注〕〔全書〕〔全注〕

○あけぬよのここちながらにやみにしをあさくらといひしこゑはききや（後撰集・雑四・一〇八一〈一〇八二〉・実方朝臣をんなのもとにまうできてかうしをならし侍けるに、をんな心しらぬ人してあらくましげにとはせてければかへり侍にけり、つとめてをんなのつかはしける　よみ人しらず）〔全講〕

○葛木や我やはくめのはしづくりあけゆくほどは物をこそおもへ（拾遺集・七一九・よみひとしらず）〔全講〕

○いはばしのよるの契もたえぬべしあくるわびしき葛木の神（拾遺集・雑賀・一二〇一・大納言朝光下らふに侍りける時、女のもとにしのびてまかりて、あか月にかへらじといひければ　春宮女蔵人左近／拾遺抄・四六九／小大君集一二「人のもとにきける人の」）〔全講〕〔最新〕

※諸注、日本霊異記・今昔物語集・袖中抄・奥儀抄・金峰山縁起などを参照する。

122　わがうへはちとりもつけしおほとりのはねにもしもはさやはおきける（474頁／六一頁）【校異】（雅・黒）初句「わかそてに」、四・五句「はねにもさるはしもはをきけり」（京・図）四「かねにも霜は」

○大鳥の羽に　やれな　霜降れり　やれな　誰かさ言ふ　千鳥ぞさ言ふ……（風俗歌「おほとり」）〔岩波〕〔叢書〕〔最新〕〔全講〕〔全集〕〔新書〕〔完訳〕〔新典〕〔ほる〕〔訳注〕〔新編〕〔全釈〕〔全注〕〔角川〕〔笠間〕〔講談〕〔学術〕〔全書〕〔集成〕

▼〔考注〕「補注」注釈一三六頁、「わがうへはの歌」及び次頁の「月もみでの歌」の解釈については、これらを一応全部撤回する。この問題について、原田芳起氏が「解釈」（昭和三十年十月）に、「大鳥の羽の霜」と題する論文をのせられ、それに従ふべきであると思ふので、以下に同氏の説を転載する。

123　つきもみでの歌（477頁／六一頁）

▼〔全講〕「月も見で寝にき」とあるのは、『日記』本文によるかぎりでは、前項「ことの葉ふかく」の場面の

　　ふけぬらんと思ふものから寝られねどなかなかなれば月はしもみず

を承けることになる。しかし、この歌では、宮の歌の第一句「月も見で」にはぴったりであるが、第二句の「寝にき」とはうち合わないという点が問題である。→四三九頁参照。

124　風のまへなるなと（482頁／六二頁）【校異】（京）風のまへなると（図）風のまへなるも（群）風のまへなると

○寿命ハ猶風前ノ灯燭ノ如シ（倶舎論）〔校定〕〔岩波〕〔大系〕〔全集〕〔新書〕〔全講〕〔完訳〕〔ほる〕〔新編〕〔角川〕〔全注〕〔笠間〕

○日をへつゝ我なに事をおもはまし風のまへなるこのはなりせは（和泉式部集Ⅱ・六三七・八日、をちつもりたるこのはを、風のさそふもうらやましくて）〔詳解〕〔修文〕〔新註〕〔全集〕〔全講〕〔対校〕〔集成〕〔訳注〕〔全釈〕〔全注〕〔角川〕

○いとへともきえぬ身そうきうらやまし風のまへなるよひのともし火（和泉式部集Ⅱ・一三四・「よひのおもひ」）〔詳解〕〔新註〕〔考注〕〔全集〕〔全講〕〔全釈〕〔角川〕

▼〔新註〕風の前なる　散りゆく木の葉の音を聞くにつけても無常が観ぜられて、それに関する仏典の語が自然に口ずさまれたのである。

倶舎論に「寿命猶如風前灯燭」法苑珠林「命如風中燈」仏説解憂経に「念々即無常、如風吹燈炎」などである。

▼〔新典〕「風の前なる」という表現は和泉の愛好した歌句と思われる。おそらく当時彼女に影響を与えたこの句を含み持つ古歌が存在していたのであろう。

※〔詳解〕〔角川〕は『堤中納言物語』『狭衣物語』に「風の前なる」との用例があることを指摘する。

125　昨日みてとくちをしう（483頁／六二頁）

▼〔角川〕引歌が想定されるが未詳。

126　神無月よにふりにたる時雨とやけふのなかめはわかすふるらん（484頁／六二頁）【校異】（雅・黒）四・五句「けふのなかめをわかすみるらん」（京・図）四・五句「けふのなかめをわかすみるらん」（群）四・五句「けふのなかめをわかすみるらん」

○竜田河錦おりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにして（古今集・冬・三一四・題しらず　よみ人しらず）〔校定〕〔角川〕

○神な月ふりみふらずみ定なき時雨ぞ冬の始なりける（後撰集・冬・四四五・題知らず　よみびとも／六帖・二〇九・「はつふゆ」／和漢朗詠集三五五）〔校定〕

127　時雨かもなににぬれたるたもとそとさためかねてそ我もなかむる（486頁／六二頁）【校異】（雅・黒）五句「われはなかむる」（京・図）四句「なかめかねてそ」

○かばかりにしのぶるあめを人とはばなににぬれたるそでといふらん（後拾遺集・雑二・九二五〈九二六〉・しのびたるをとこのあめのふるよまうできてぬれたるよしかへりていひおこせてはべりければ）〔全注〕

128　うつろはぬときはの山も紅葉せはいさもしゆきてとふ〳〵もみん（495頁／六三頁）【校異】（雅・黒）五句「のと〳〵とみむ」（京・図）五句「のと〳〵とみむ」（群）五句「のと〳〵とみむ」

○秋くれど色もかはらぬときは山よそのもみぢを風ぞかしける（古今集・賀・三六二）〔角川〕

※『古今集』注釈書の多くが「秋くれど」の詠者を「坂上是則」と注する。

129　たかせ舟はやこきいてよさはることさしかへりにしあしまわけたり（489頁／六三頁）【校異】（雅・黒）二句「はやさしいてよ」（京）三・四句「さはることままにし」（図）三・四句「さはることさしまにし」

○みなといりの葦わけを舟さはりおほみわが思ふ人にあはぬころかな（拾遺集・恋四・八五三・題しらず　人まろ／拾遺抄・二七二、四句「恋しき人に」／万葉集二七五五〈二七四五〉）〔詳解〕〔校定〕〔考注〕〔全書〕〔全集〕〔集成〕〔対校〕〔完訳〕〔訳注〕〔ほる〕〔新編〕〔角川〕〔全注〕〔笠間〕

○わかことやわひしかるらんさはりおほみあしまわけつるふねの心地は（一条摂政御集・四三・おなし女に／一七四・二句「かなしかるらん」）〔角川〕

○あしわくる程にきにけりたつ浪のをとにきゝてしこやなにはかた（和泉式部集Ⅰ・六六六・あしおほくつみあけたる舟にいきあひて）

▼〔全講〕『秋篠月清集』の「高瀬舟ほのみしま江に漕ぎかへり葦間の道を猶や障らん」（巻四・恋三・三島江恋）などは、この歌を本歌としたものだろう。

130　やまへにもくるまにのりて行へきにたかせの舟はいかゝよすへき（500頁／六三頁）【校異】（雅・黒）初句「やま人は」（雅）二・三句「くるまにのりて行へきを」（黒）二・三句「くるさにのりてゆくへきを」

▼〔全注〕車と船との連想の背景には、『和漢朗詠集』三月尽に収める「春を送るには用ゐず舟車を動かすことを　ただ残鶯と落花とに分かる」のような表現の存在を考えうる。

131　四十五日のいみたかへ（504頁／六四頁）【校異】（雅・黒）「四十五日の御いみたかへ」（京・図）（群）「四十五日の御方たかへ」

※〔全講〕が『拾芥抄』を挙げ詳述する。

132　ねぬる夜のねさめの夢にならひてそふしみのさとをけさはおきける（513頁／六五頁）【校異】（雅・黒）初句「いぬるよの」四句「ふしみのさとはけさはおきつる」（京・図）五句「けさはおきつる」（群）けさは起つる

○ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな（古今集・恋三・六四四・人にあひてあしたによみてつかはしける　なりひらの朝臣／六帖・二〇三〇・なりひら「ゆめ」／伊勢物語・一〇三段／業平集Ⅰ・五〇などにも）〔笠間〕

○みやこ人くるればかへるいまよりはふしみのさとのなをもたのまじ（後拾遺集・雑五・一一四六〈一一四七〉・ふしみといふところに四条の宮の女房あまたあそびて日くれぬさきにかへらむとしければ　橘俊綱）〔新編〕

○君ならてたれかはまたは山しろのふしみのさとをたちならすへき（敦忠集・一六・ありはらのすけひらかむすめに）〔角川〕

○つらきをばなぞやとおもひてわすれなばねざめのゆめもやすからましを（能宣集・四五四・つれなき人に）〔笠間〕

133　いはほのなかこそ（520頁／六六頁）【校異】（雅・黒）いはほのなかにこそ

○いかならむ巌の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ（古今集・雑下・九五二・題しらず　読み人しらず）〔校定〕〔詳解〕〔修文〕〔新註〕〔叢書〕〔最新〕〔講談〕〔全書〕〔大系〕〔全集〕〔集成〕〔新書〕〔完訳〕〔訳注〕〔新典〕〔学術〕〔ほる〕〔新編〕〔全講〕〔全釈〕〔角川〕〔全注〕〔笠間〕

※〔最新〕〔全講〕〔全注〕などは、『和泉式部集Ⅰ（正集）』「こゝろにもあらすあやしき事いてきて、れい」（ママ）すむ所もさりてなけくを、おやもいみしうなけくと聞ていひやる、かみのもしはよのふることなり」と詞書される、四三三～四四四の歌を参照する。

134　又うきこともあらはいかゝせん（520頁／六六頁）【校異】（雅・黒）またうきことあらはいかゝせん

○世をすてて山にいる人山にても猶うき時はいづちゆくらむ（古今・九五六・雑下・山のほうしのもとへつかはしける　凡河内みつね／躬恒集、初句「世をうしと」）〔集成〕〔学術〕〔訳注〕〔ほる〕〔全注〕

135　いさしらす（526頁／六六頁）【校異】（雅・黒）よしたゝしらす（京・図）よしたゝいはみかた（群）よしたゝいはみかた

○人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかににほひける（古今・四二・春上・はつせにまうづるごとにやどりける人の家にひさしくやどらで、ほどへてのちにいたれりければ、かの家のあるじかくさだかになむやどりはあるといひいだして侍りければ、そこにたてりけるむめの花ををりてよめる　つらゆき／貫之集Ⅰ・七九〇）〔岩波〕〔大系〕〔対校〕〔全講〕

○人はいさ我はなきなのをしければ昔も今もしらずとをいはむ（古今・六三〇・題知らず　もとかた）〔最新〕〔全書〕〔新書〕〔集成〕〔完訳〕〔訳注〕〔新典〕〔ほる〕〔新編〕〔角川〕〔全注〕

○つらけれど人にはいはずいはみがた怨ぞふかき心ひとつに（拾遺集・九八〇・よみひとしらず）〔校定〕〔詳解〕〔修文〕〔最新〕〔全講〕〔全釈〕〔全注〕

○いはみがたうらみぞふかきおきつなみうちよするもにうづもるるみは（古今六帖・一八五五「藻」）〔詳解〕〔全講〕

○岩見潟なにかはつたきつらからば恨みがてらに来ても見よかし〔昭完〕

▼〔考注〕「人はいさ…」の上句だけを慣用的に用ゐたとみる方がふさはしいであらう。

▼〔全集〕「人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとを言はむ」（古今・恋三　在原元方）を引く。人はともかく、私は浮き名の立つのを惜しむからあなたのことを昔も今も知らないと言おう、の意。一三四ページの「今の間に」、一三五ページの「君はさは」の歌に「名」が出てくることに関連する。「ひとはいさ心もしらずふるさとは…」（古今・春上　貫之）を引く説は不可。

136　思はましかは（534頁／六七頁）

○いたづらにすぐる月日をたなばたのあふよのかずと思はましかば（拾遺集・秋・一五一・左兵衛督藤原懐平家屏風に　恵慶法師／拾遺抄・九六）

○まちえたるひとよばかりをたなばたのあひみぬよはとおもはましかば（後拾遺集・秋上・二四五・七月七日に詠める　右大将通房）〔校定〕

○ひとごとはあまのかるもにしげくともおもはましかばよしやよのなか（六帖・二一〇八・「うらみ」）〔詳解〕〔岩波〕〔修文〕〔考注〕〔最新〕〔大系〕〔全講〕〔全集〕〔対校〕〔集成〕〔新書〕〔完訳〕〔全注〕〔学術〕〔新典〕〔ほる〕〔新編〕〔角川〕〔笠間〕

※「ひとごとは」の歌の詠者を伊勢と注する指摘は、古今六帖の作者名表記の原則を読み違ったもので、誤り。

137　今の間に君きまさなむ恋しとて名もあるものを（537頁／六七頁）【校異】（雅・黒）二句「君もきませよ」（京）二句「君きまさなん」（しもにませ本如此如何）（図）二句「君きまさなん」（群）二句「君きまさなん」

▼〔全集〕「名」は宮の引いた「いさしらず」の歌の「我はなき名の惜しければ」に対応させてつかった。したがって、（宮様も浮き名を恐れるでしょうが私にだって）外聞というものがありますものを、の意になる。→一三三ページ注三〇。〔新編〕

138　雨かせなといたう降り吹日（549頁／六九頁）

※諸注、『日本紀略』長保五年十一月十三日条「大風暴風雷電」を参照する。

139　かれはてゝ我よりほかにとふ人もあらしのかせをいかゝきくらん（555頁／六九頁）【校異】（京）五句「いかにきくらん」（図）四・五句「あらしの風といかにきくらん」

▼〔新註〕源氏物語帚木に、木枯らしの女に対して殿上人が「庭の紅葉こそ踏み分けたるあともなけれ」と皮肉つたのと似ている。

140　おもふことなくて過にしおとゝひと昨日とけふになるよしもかな（564頁／七〇頁）【校異】（雅・黒）二句「なくてくらして」（京・図）二句「なくてすくしゝ」、三句「おとゝひを」、五句「なすよしもかな」（群）二句「なくてすくしゝ」、三句「おとゝひを」、五句「なすよしもかな」

○おとゝひもきのふもまちしほとゝきすけふさゑなかすなそや世中（長能集・二一・また、をなしころ、或法師の坊にて、同こゝろを）〔角川〕

▼〔全注〕北山久備の『勇魚鳥』には、「おとゝひあさて」なる語の説明にこの「おもふこと」の歌を「和泉式部物語にあり」として引いている。

※北山久備『勇魚鳥』は『日本随筆大成』（吉川弘文館・一九七四）所収。

141　いろいろみえし木のはものこりなく（566頁／七一頁）

○神な月　しくれふりくる　み山より　風さへことに　をくれねは　よものこのはも　のこりなく　なかむるそらも　はれすのみ　くもり

わたれは　……　とはすかたりを　あつめたるなり（曾禰好忠集・二七七・三六〇首歌・冬）〔角川〕

○払ひなされたる池のおもて、みどり深う霞みわたりたるに、蓮の花のいろいろ開けわたりたるほど、まことに極楽の八功徳池の池もかうこそあらめと思ひやられて、（浜松中納言物語・二五八頁）〔学術〕

142　なくさむる君もありとはおもへとも猶ゆふくれは物そかなしき（568頁／七一頁）【校異】（雅）錯簡アリ。（黒）二句「君もありとは（さりイ）」

○夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふとて（古今集・恋一・四八四・題しらず　よみ人しらず）〔全注〕〔角川〕

○夕暮は物そ悲しきかねのをとを　あすも聞へき身としらねは（和泉式部集Ⅰ・三五五・帥ノ宮ニテ題十給ハセタル　大井カハノイカタユフクレノ鐘……、和泉式部集Ⅲ・一三六、Ⅳ・二四二）〔学術〕

143　おきなからあかせる霜のあしたこそまされるものはよになかりけれ（573頁／七一頁）【校異】（雅・黒）三句「あしたより」・五句「よになかりけり」（京・図）五句「よになかりけり」

○をきなからあかせるしものあしたよりまされる物はよるなかりけり（和泉式部集Ⅰ・四〇九・霜しろきつとめて、いかゝとある人に）〔全注〕

▼〔学術〕白楽天の詩（空閨怨）に「秋霜下りんと欲して、手先づ知る」とあるように、一人寝は霜夜の寒気を鋭敏に感じるとの立場で、この歌は詠まれている。『正集』六七等にもこうした立場の歌が見える。

144　我ひとりおもふおもひはかひもなしおなしこゝろに君もあらなん（576頁／七一頁）【校異】（雅・黒）二句「思ふはおもふ」（京・図）二

句「おもふは思ふ」（群）二句「思ふは思」

▼〔全注〕「我ひとり」の言いまわしは、勅撰集では『古今集』から見えるが、『拾遺集』『後拾遺集』の用例が目立つ。「一首の中に『思ふ』を重ね用いる技巧は、『古今集』誹諧歌の『思へども思はずとのみ言ふなればいなや思はじ思ふかひなし』以来、愛情を強調する歌によく用いられる」（『小松文庫』）。

145　君はきみわれは我ともへたてねはこゝろ〳〵にあらむものかは（578頁／七二頁）

▼〔学術〕この歌の影響を受けたと考えられる歌としては、『弁乳母集』の「君は君我は我にて過ぐすべき今はこの世と契りしものを」（84）がある（『弁乳母集』には、他にも和泉の歌の影響と見うるものが、私の通覧の範囲内でも数首ある―6、15、71、96―。その多くは弁乳母以外の人の歌―84も―であるが、それにしても、弁乳母もまた、和泉式部の影響圏内にあったと言いうる。もともと、宮仕え先の関係からいっても、和泉式部に関する情報は得やすい立場にあるが）。

▼〔全注〕「われはわれ」という表現については、『源氏物語』澪標巻に、明石君に娘誕生を聞き知った時の紫上の心情を叙して、「ただならず思ひ続けたまひて、われはわれと、うちそむきながめて」とあったり、松風巻にも明石君のことを意識しないように紫上に語る光源氏のことばに、「われはわれと思ひなしたまへ」、また、真木柱や手習巻にも同じ言い方があり、当代の慣用的な言いまわしと考えられる。参考、「なく虫のひとつこゑにも聞えぬは心〳〵に物やかなしき」（正集一三六）

146　たえしころたえねと思したまのをの君により又おしまるゝかな（582頁／七二頁）【校異】（雅・黒）初句「たえし時」・三句「玉のをゝ」（京）三句「玉の緒を」（群）三句「玉の緒を」

○きみがためをしからざりしいのちさへながくもがなとおもひぬるかな（後拾遺集・恋二・六六九・をむなのもとよりかへりてつかはしける　少将藤原義孝／義孝集・一二）〔対校〕〔角川〕

○たえしときこゝろにかなふ物ならは我か玉のをによりかへてまし（和泉式部集Ⅰ・七六、Ⅴ・二四）〔全注〕

147　いとまなみ君きまさすは我ゆかんふみつくるらんみとをしらはや（592頁／七四頁）【校異】（図）五句「道をしらねと」

○わがいほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど（古今集・雑下・九八二・題しらず　よみ人知らず）〔学術〕〔全注〕

148　わがやとにたつねてきませふみつくるみちもをしへんあひもみるへく（594頁／七四頁）【校異】（雅・黒）四句「道ををしへん」

○わがいほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど（古今集・雑下・九八二・題しらず　よみ人知らず）〔角川〕

○恋しくはとぶらひ来ませちはやふる三輪のやまもと杉たてる門（俊頼髄脳）〔講談〕

149　さゆる夜のかすかくしきは我なれやいくあさしもをゝきてみつらん（596頁／七四頁）【校異】（雅・黒）五句「おきゐ（てイ）みる（つイ）らん」

○みづのうへに　かずかくごとき　わがいのち　いもにあはむと　うけひつるかも（万葉集・二四三七〈二四三三〉）〔最新〕

○暁のしぎのはねがきももはがき君がこぬ夜は我ぞかずかく（古今集・恋五・七六一・題しらず　よみ人しらず）〔校定〕〔詳解〕〔岩波〕〔修文〕〔考注〕〔叢書〕〔講談〕〔全書〕〔最新〕〔大系〕〔全集〕〔集成〕〔学術〕〔対校〕〔新書〕〔完訳〕〔訳注〕〔新典〕〔ほる〕〔新編〕〔全釈〕〔全注〕〔角川〕〔笠間〕

○たねまきしわがなでしこのはなざかりいくあさつゆのおきてみつらん（詞花集・夏・七二〈七〇〉・贈左大臣の家に歌合し侍りけるによめる　修理大夫顕季）〔全注〕

150　みそれたちたる雨（603頁／七五頁）

○みそれふりくもれる冬のはれすのみつきせぬものやまろか身のうき（曾禰好忠集Ⅰ・三四七）〔角川〕

○降るものは　雪。霰。霙は、にくけれど、白き雪のまじりて降るをかし。（枕草子・三七〇頁・「一三三　降るものは」）〔角川〕

151　うつゝにておもへはいはんかたもなしこよひのことを夢になさはや（614頁／七六頁）

○うつつにてゆめばかりなるあふことをうつつばかりのゆめになさばや（後拾遺集・恋二・六七五・をむなにつかはしける　西宮前左大臣）〔全注〕

152　しかはかりちきりし物をさためなきさはよのつねにおもいなせとや（616頁／七六頁）【校異】（雅・黒）五句「思ひなさはや」

○しかばかりちぎりしものをわたりがはかへるほどにはわするべしやは（後拾遺集・五九八・左注「このうた義孝少将わづらひ侍けるに、なくなりたりともしばしまて経よみはてむ、といもうとの女御にいひはべりてほどもなくみまかりてのち、わすれてとかくしてければそのよははのゆ／大鏡、今昔物語集）〔学術〕

153　ほとしらぬいのちはかりそさためなきちきりてかはすすみよしの松（620頁／七七頁）【校異】（雅・黒）二句「命はかりに」、四・五句「ちきりしことはすみのえのまつ」（京・図）四・五句「ちきりしことはすみの江のまつ」（群）四・五句「契しことは住の江のまつ」

○我見てもひさしく成りぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ（古今集・雑上・九〇五・題しらず　よみ人しらず）〔校定〕〔詳解〕〔岩波〕〔新註〕〔考注〕〔最新〕〔全書〕〔大系〕〔全講〕〔全集〕〔対校〕〔新書〕〔完訳〕〔訳注〕〔ほる〕〔新編〕〔全釈〕〔全注〕〔角川〕〔笠間〕

154　あな恋しいまもみてしか山かつのかきほにさけるやまとなてしこ（625頁／七七頁）【校異】（京・図）四句「かきをにおふる」（群）「垣ほにおふる」

○あなこひし今も見てしか山がつのかきほにさける山となでしこ（古今集・恋四・六九五・題しらず　よみ人しらず）〔詳解〕〔岩波〕〔昭完〕〔校定〕〔新註〕〔考注〕〔叢書〕〔最新〕〔講談〕〔全書〕〔大系〕〔全講〕〔全集〕〔集成〕〔対校〕〔新書〕〔完訳〕〔訳注〕〔学術〕〔新典〕〔ほる〕〔全釈〕〔新編〕〔角川〕〔笠間〕

▼〔全注〕応永本は四句を「かきほにおふる」とする。応永本の本文は『古今集』の本阿弥切と同じで、『新撰和歌』巻四にのせる同歌もこれと同じである。なお、元永本、巻子本、清輔本等は「かきほにさける」で、『古今六帖』六にのせるのはこちら。『古今集』の古歌をそのまま使用。なお、寛元本の歌の右に「古今」と出典を記す。

155　恋しくはきてもみよかしちはやふる神のいさむるみちならなくに（627頁／七七頁）

○恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに（伊勢物語・七一段、昔男）〔詳解〕〔岩波〕〔新註〕〔考注〕〔叢書〕〔講談〕〔全書〕〔最新〕〔大系〕〔全集〕〔集成〕〔対校〕〔完訳〕〔訳注〕〔新典〕〔ほる〕〔新編〕〔全釈〕〔角川〕〔笠間〕〔全講〕〔学術〕

▼〔新註〕袋草子に伊勢物語の書名について述べた條に「其名目有二義、有密事之故、為構僻事之由、号伊勢物語、諺ニ伊勢ハ僻ト云故也。一ニハ斎宮ノ為詮故号伊勢、是正義カ。和泉式部ガ本ニハ以斎宮事最先ニ書ケリ」とある。即ち和泉式部が一種の伊勢物語を所持してゐたことを傳えてゐる。

▼〔全注〕応永本は右肩に『新続古』、寛元本は『伊勢物語』、また拾葉集本は『続千載』とあげる出典は三様に異るが、『新続古今集』には収めていない。

156　あふみちは神のいさめにさはらねとのりのむしろにをれはたゝぬそ（629頁／七八頁）【校異】（京・図）三句「あらねとも」（図）五句「おりはたゝぬそ」（群）三句「あらねとも」

○是ノ如キ増上慢ノ人、退クモ亦佳シ（法華経・方便品）〔角川〕

157　われさらはすゝみてゆかん君はたゝのりのむしろにひろむはかりそ（632頁／七八頁）【校異】（雅）二句「す〇みして」（黒）「すみして」（雅・黒）四句「法の筵を」（京）四句「法の筵を」（図）四・五句「法の筵をひろむはかりに」（群）四句「法のむしろを」

▼〔全講〕以前の、「いとまなみ君きまさずは我ゆかんふみつくるらんみちを知らばや」などと同種で、どこか「宮邸入り」に対してさりげなく積極的な姿勢をただよわせている詠歌である。

158　ものゝ枝に（633頁／七八頁）【校異】（雅・黒）「枝に」

▼〔校定〕雪の降りかゝてゐる木の枝に手紙をつけて。凡て当時は人に物を送る場合に草木の枝にそれをつけてやる風習があった。枕草子「萩ながらあるにつけて」とあるも、萩の露の置いてゐるまゝの枝に手紙を附けて届けたのである、萬葉「み吉野の山松が枝は愛しきか

も君が御言を持ちて通はく」とあるも、松の枝に手紙を附けて贈られたのを見て詠んだもの。

159　雪ふれは木ゝのこのはも春ならてをしなへ梅の花そさきける（634頁／七八頁）【校異】（雅・黒）四句「をしへむむめの」

○霞たちこのめもはるの雪ふれば花なきさとも花ぞちりける（古今集・春上・九・ゆきのふりけるをよめる　きのつらゆき）〔学術〕

○霜がれの枝となわびそ白雪のきえぬ限は花とこそみれ（後撰集・冬・四七六・題しらず　読み人しらず）〔角川〕

○わがやどの梅にならひてみよしのの山の雪をも花とこそ見れ（拾遺集・春・九・題しらず　よみ人しらず）〔学術〕

160　梅はゝやさきにけりとておれはちる花とそ雪のふれはみえける（636頁／七八頁）【校異】（雅・黒）五句「ふるはみえける」（京・図）五句「ふるはみえける」（群）五句「ふるは見えける」

▼〔全集〕この歌にしても宮の贈歌にしても、歌才を感じさせぬほどに素朴で類型的である。二人の心が相寄りすぎて、緊迫感を失っているせいかとまで思わせる。

161　冬の夜の恋（をイ）しきことにめもあはてころもかたしきあけそしにける（638頁／七九頁）【校異】（雅・黒）初句「冬の夜は」（群）初句「冬の夜は」

○さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうぢのはしひめ（古今集・恋四・六八九・題しらず　よみ人しらず）〔全注〕〔笠間〕

○わがこふるいもにあひさすたまのうらにころもかたしきひとりかもねん（六帖・一八九四・「うら」）〔角川〕

162　冬の夜のめ（は）さへこほりにとちられてあかしかたきをあかしつるかな（640頁／七九頁）【校異】（京・図）五句「あかしけるかな」（群）「明しけるかな」

○こひしさはねぬになぐさむともなきにあやしくあはぬめをもみるかな（後撰集・恋二・六七一〈六七二〉・題しらず　源うかぶ）〔学術〕

163　くれ竹の世〻のふることおもほゆるむかしかたりはわれのみやせん（643頁／七九頁）【校異】（京・図）三句「おもほえむ」五句「君のみそせん」

○世にふれば事のはしげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞなく（古今集・雑下・九五八・題しらず　よみ人しらず）〔対校〕

○くれ竹の　世世のふること　なかりせば　いかほのぬまの　いかにして　思ふ心を　のばへまし　……　君がやちよを　わかえつつ見む（古今集・一〇〇三・雑躰　ふるうたにくはへてたてまつれるながうた　壬生忠岑）〔考注〕〔全講〕〔学術〕〔全注〕〔角川〕

▼〔全集〕女はついに宮の邸にはいる。この日記における最大の区切りに達したわけであるが、同時に、邸入り後の叙述はこの新事態を迎えて騒然たる人間関係の描写に移り、この日記に特有な、贈答歌を軸とする微妙な恋人同士の心理は扱われなくなる。邸入り後の格段には和歌が一首も登場していないことに注意。

▼〔ほる〕この歌は『竹取物語』中の「くれたけのよよの竹取のやまにもさやはわびしきふしをのみ見し」の歌を頭においたものと考えられる。これまでの二人の恋の道すじを『竹取物語』のように、ふるごととして昔がたりのかたちで語ろうと言うのである。ある意味ではこの日記全体の「跋」とも取れる歌である。「昔がたり」は、二人の恋のいきさつの思い出話。

▼〔全注〕「むかしかたり」は、歌集にこの歌を含めて四例。「秋比はやうゆふくれにかたらひし人のきて物語なとせしに日来へて云やるいつとてもなかめしことそ増りける昔かたりをせし夕より」（続集三〇五）のように、過往の現実にあった事柄・話題をいう。

163　くれ竹のうきふししけき世中にあらしとそおもふしはしはかりも（646頁／八〇頁）【校異】（黒）五句「しはしいかりも」

○今更になにおひいづらむ竹のこのうきふししげき世とはしらずや（古今集・雑下・九五七・物思ひける時いときなきこを見てよめる　凡河内みつね）〔ほる〕

164　いまかの北のかたに（657頁／八一頁）

▼〔角川〕北の対。寝殿の北側にある建物。正妻済時女が住んでいた。二人は夜も居所を別にしており、宮の身の回りのことは乳母が取り仕切っていたと前に述べられていた（「一九宮邸入りの誘い」参照）。ちなみにこの東三条院南院には父の冷泉院もともにあったので、寝

殿は院の居所であったと考えられる。また東の対については、兄の東宮居貞が行幸の際に居所として使用していることが見える（「又東宮同時移給南院東対」〈『小右記』寛弘二年十一月二十七日条〉）。表の空間としての性格の強い東の対は、行幸などの際の東宮の居所としておかれ、敦道の居所は西の対だったかと推測される。大江匡衡の「七言。初冬於都督大王書斎同賦唯以詩友応教詩」題の詩に「西海王之宴西園。盛弘魯聖之道」（『江都督納言集』・中）とあり、敦道主催の詩宴が、「西園」すなわち西の対で催行されていることも傍証となろう。

165

正月一日に院のはいらいに（677頁／八三頁）【校異】（雅・黒）正月一日に院の御はいらいに

▼〔学術〕『日記』では、長保六年正月の冷泉院の拝礼を、「正月一日」の事と記しているが、これについては、早く岡田希雄氏が、この年一月三日に道長が院の拝礼に赴いている事実を『御堂関白記』より指摘し、『日記』の「一日」は、「三日」の誤りとされた。そして、この点が他作である根拠の一とする見解もある。しかし、現在、一般的には、道長は三日に参上したが、院の拝礼そのものは、正月一日から三日に渡って行なわれ、『日記』はその中の「一日」に行われたことを記したのだと考えられている。私見では、帥宮は冷泉院と御同居中であり、親子の仲であり、『日記』によれば日常も院のお部屋によく行かれた様子（上巻三四〇頁）なので、たぶん、元旦早々拝礼に赴かれたであろう。しかし、道長、公季（上巻二四四頁の「内の大殿」）を初め諸卿は、この年は一月三日に冷泉院御所に拝礼に参上している（『御堂関白記』）。したがって、一日にも、院の拝礼そのものはあったとしても、「殿ばら数を尽くして」という状況だったとは、とても思えない。現在見る『日記』諸本はすべて「一日」の事とするから、「一日」の本文は認めるべきだが、そうすると作者は意図的に諸卿の参入を「一日」のこととしたのではないか。すなわち、作者はこれによって元旦早々、父院のもとに拝礼に赴かれる若き皇子の折目正しさと、その日多くの公卿にたいせつにかしずかれる若き皇子の華やかさといったものを、これによって、読者に印象づけようとしているのであろう。

▼〔集成〕正月に院の御所で行われる参賀の儀式。ここは帥宮の父冷泉院に参賀するのである。「殿ばら」は、この参賀の公卿・殿上人ら貴族たち。道長の日記によれば、内大臣公季以下諸卿が来た、とある。但し、三日の記事だが、「一日」は、ついたち頃、の意か。

▼〔角川〕同年正月の『御堂関白記』には「参冷泉院、内府・御家諸卿等皆来、有拝礼」（正月三日条）とあり、道長は三日に冷泉院の拝礼

に参上している。拝賀の式自体は一日から三日にかけて行われているので、帥宮は一日に参上したものか。

※〔集成〕の指摘を踏まえるなら、「つひたち」と仮名で書かれていた箇所に「一日」と漢字が宛てられ、現存諸本の「正月一日」に至る、との転写の過程を想定することもできるか。

付記

脱稿後、島内景二『新訳　和泉式部日記』（花鳥社・二〇二〇、底本「元禄版本（扶桑捨葉集、所収）」が刊行された。同書の指摘する和歌、漢詩等を本稿に組み入れることができなかったこと、お断りしておく。